



つがるの昔っこ (昔話) 16

# 地名の話コ (標準語)



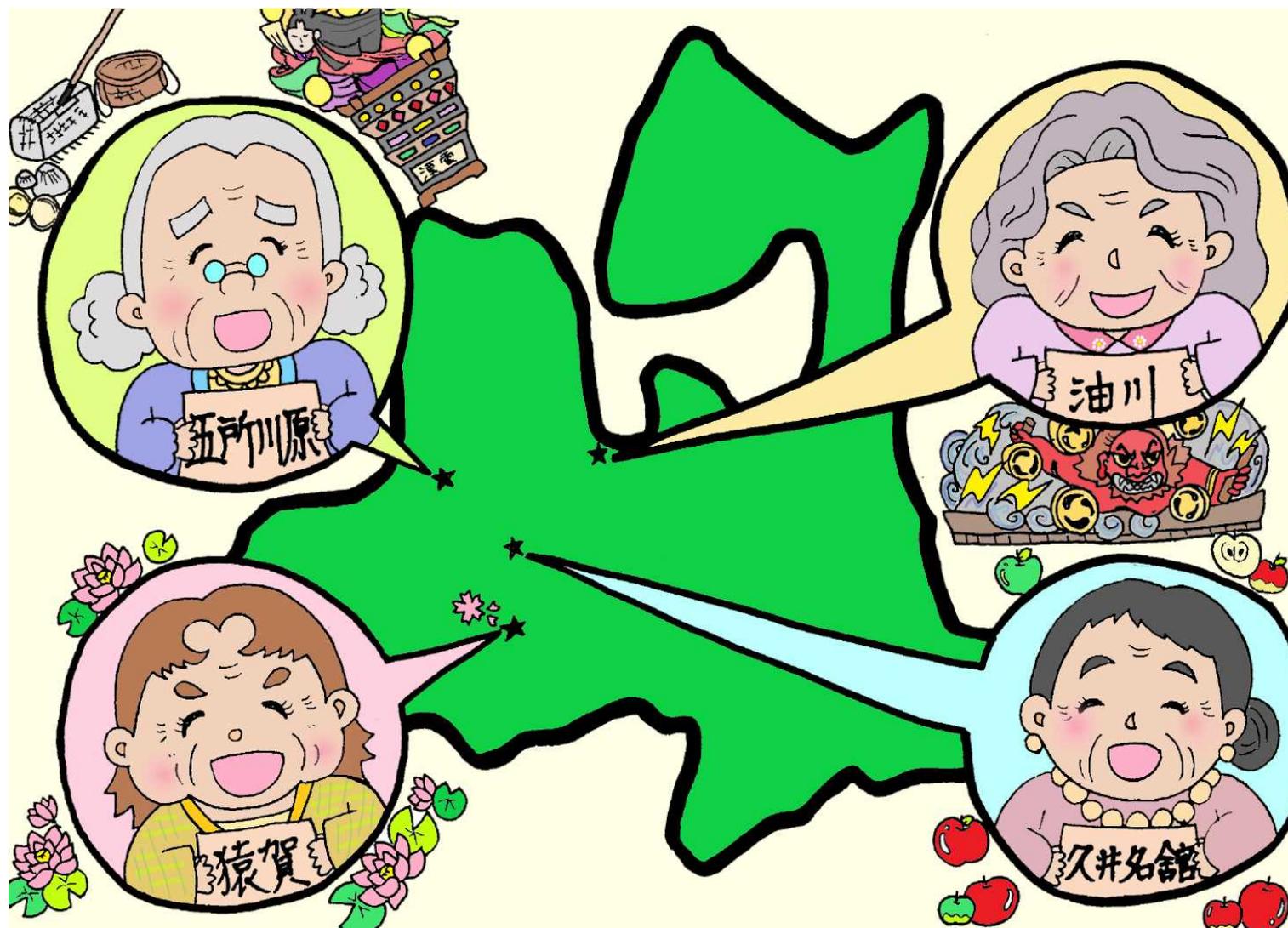
国土交通省 東北地方整備局  
岩木川ダム統合管理事務所  
イラスト、カラーリング  
:やざわ ゆな

ある年、弘前の観桜会に来た、四人の婆様が居ました。四人の婆様達は昔、同じ村に住んでいた幼なじみで、仲良しでありました。

娘になった頃、四人はそれぞれ、嫁になって行きました。一人は猿賀に、一人は久井名館に、一人は五所川原に、一人は油川に行きました。

久しぶりに、観桜会で再会した婆様達は懐かしい昔話に花を咲かせ、夫の話や、子供、孫のはなしをして飽きる事無く過ごしていました。

そして、それから、それぞれ、自分の住んでいる所の話をして聞かせ合いました。



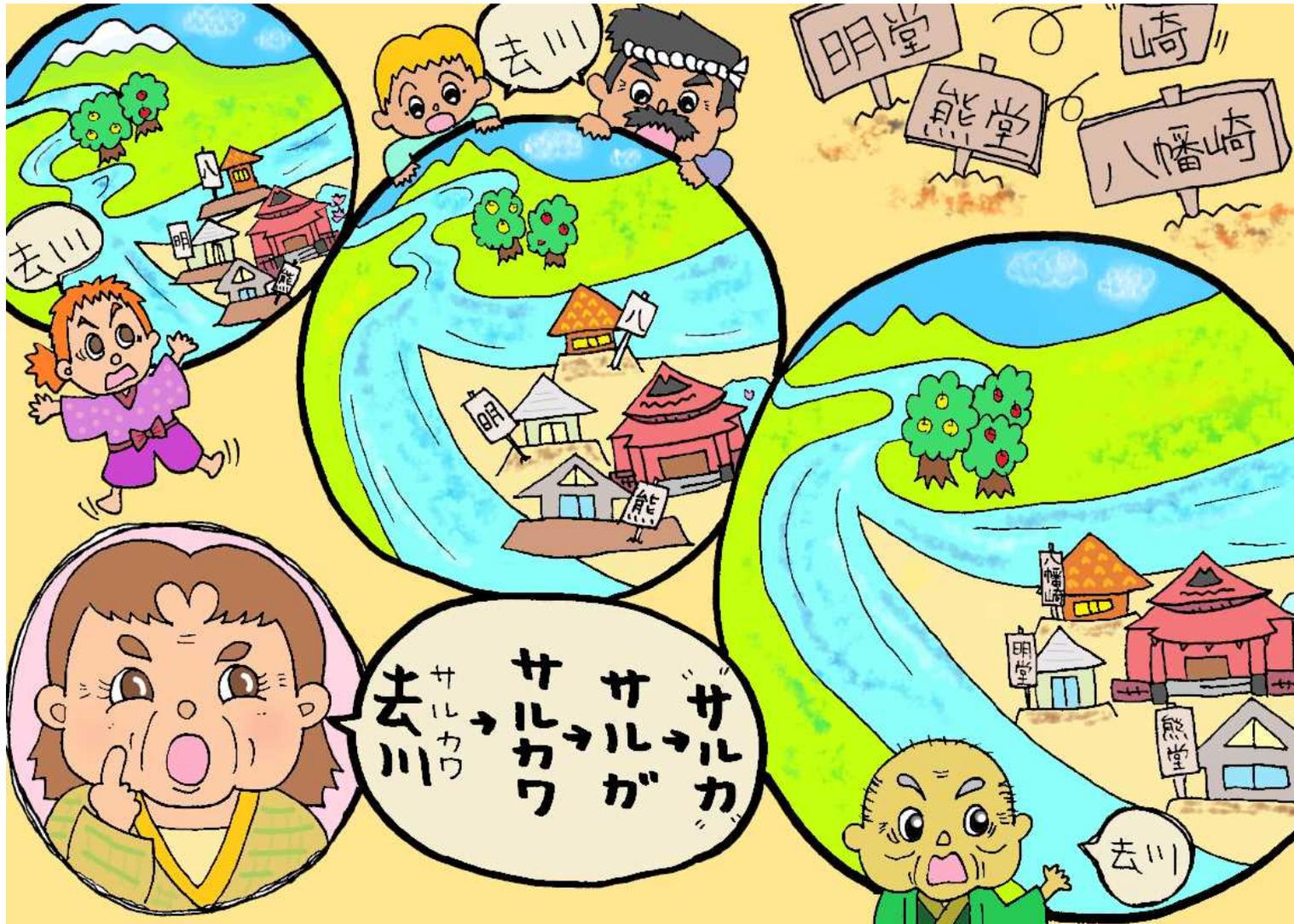
## 猿賀(さるか)の婆様の話

昔々、浅瀬石川と平川は、丁度、今の猿賀さまのあたりで合流してありました。  
その川に、いくつも突き出た陸地があって、それは、明堂崎、熊堂崎、八幡崎と呼ばれていました。



何十年も、何百年も経って、この二つの川の出会う所が少しずつ動いていて、  
いまでは、この二つの川は、尾上を挟んで、北の浅瀬石川と、南の平川、猿賀からずーっと離れた藤崎あたり  
で合流して、今度は岩木川と一緒にになっている。

川の近くで暮らして居た人達は、川が離れていったので、そこを、『去川、去川』といいました。  
そして、サルカワという音がいつのまにか訛って、サルガになって、三つの崎も八幡崎の他は崎が取れて、  
明堂、熊堂という地名になって、今でも残っているそうです。  
これが私の住んでいる猿賀の話です。



## 久井名館(くいなだて)の婆様の話

昔、津軽の大部分は南部の領地でありました。このあたりは南部の家来の、名久井京極という侍が支配していました。

この侍の名前をとって、その屋敷を名久井館と言って、その村の名前を名久井館村と言っていました。



天正年間、大浦から為信様が攻めてきて、ここを奪いました。

それから、この名久井館村は津軽の領地になりました。

名久井京極という人は、勇敢な方で、僅かばかりの家来と戦って、為信様を苦しめたそうです。

そこで、為信様は、戦が終わってからも敵ながら天晴れ(あっぱれ)と、名久井京極が居なくなっても、この村の名前をそのまま残すことにしました。

ただし、『上の字二つ入れ替えろ』と言ったので、それから、ここは、久井名館になりました。



## 五所川原（ごしょがわら）の婆様の話

昔、ある年の岩木川の大水の時に、今の五所川原の元町あたりに小さなお堂が流れ着きました。中を見ると、ご神体が納められていました。どこから来たのかと探してみたら、岩木川の上流の相馬の五所ものでありました。そこで、そのお堂を返しました。

そうしたら、その年の秋の大水の時に同じお堂がまた同じ所に流れ着きました。また、返しましたが、次の年もまた、同じ事が繰り返されました。



相馬の五所の人達は、『神様がそこに行きたくて行くんだらう』と言って、元町に置くことにしました。五所の神様が流れてきて止まった川原だということで、それから、ここを五所川原と言うようになりました。元町の八幡様にそのときのご神体が今でも祭られているそうです。



## 油川(あぶらかわ)の婆様の話

昔々、今の青森の油川のあたりは、広い広い野原で、そこに鶴の親子が住んでいました。ある日、野火が起こって、火がめらめらと燃え上がり、野原一面に広がりました。

さー、鶴の巣にも迫ってきました。母親の鶴は子鶴を庇(かば)って羽を広げていましたが、とうとう火をかぶって、死んでしまいました。



火が行ってしまったあと、母鶴は焼けただれて体から油をにじませて倒れていました。その油が、タララ、タララと流れ出てきてすぐそばの川に入って、川の色が七色に光ったそうです。我が身を捨てて、子鶴を守った母鶴の姿を見た町の人達はここを『母鶴の油が流れていた川』だということで『油川』と呼ぶようになりました。



四人の婆様達は、朝から夕方まで喋って喋って、飲んで飲んで、食べて食べて、笑って笑って、来年も元気で又会いましょうと約束して、それぞれの家に帰りました。

おしまい。

